



Vol.142

令和4年度4月号

伊豆沼2工区、3工区の堤防において野火(野焼き)が行われました。

伊豆沼漁協、伊豆沼土地改良区、新田北部土地改良区および財団による堤防の野火(野焼き)を3月5日(土)に行いました。堤防は普段、ヨシ原に覆われており、そこには多種多様な湿性植物も生育しています。しかし、ヨシ原を放置するとヤナギなどの樹木が入り込み、見通しの悪い林になってしまいます。今回の野火により雑木・雑草やゴミの不法投棄が多かった堤防周辺も、ヨシ群落の維持が図られるとともに沼の景観が改善されることが期待されます。



野火前



野火後

遅れたガンの北帰行



雪の日、畦で採食するマガン

マガンは農地で採食し、湖沼でねぐらをとるため、積雪が多かったり、ねぐらが凍っている場合は生活できません。そのため、春の北帰は雪どけとともにすすみます。今冬は寒波が厳しく、中継地である北東北の秋田県などで積雪が多かったため、例年2月上旬にピークとなる北帰行が1ヶ月ほど遅れました。宮城県からは姿を消しましたが、北東北、北海道などを中継し、もうしばらく日本に滞在します。

ゼニタナゴの産卵生態研究について

絶滅危惧種を守るには、その生き物のことを知らなくてはなりません。長年、伊豆沼・内沼で保全活動に取り組んできたゼニタナゴの産卵生態研究の成果を、イギリスの生命科学専門誌（Journal of Fish Biology）に発表しました。ゼニタナゴはイシガイ科の二枚貝類（通称：どぶがい）に卵を産み付けますが、本研究ではゼニタナゴがどのような貝を好んで産み付けるのかを研究しました。その結果、小型のゼニタナゴは小型の貝を、大型のゼニタナゴは大型の貝を好むことを確認しました。実験では、小型のゼニタナゴが（無理をして？）大型の貝に産み付けた場合、せっかく産み付けた卵が貝から吐き出されてしまうことも確認しました。

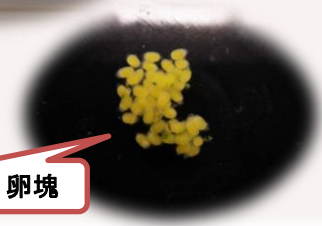
近年、伊豆沼・内沼では二枚貝がほとんど繁殖できておらず、大型個体ばかりになっています。研究結果をもとに計算してみると、現在の伊豆沼の二枚貝は、大型のゼニタナゴであっても大きすぎる状況にあることが分かりました。この発表では、明らかになった産卵生態から、その進化史や適応的意義についても考察しています。まだまだ未知な点が多いゼニタナゴの生態ですが、引き続き研究し、保全に活かしていきたいと思えます。 <https://doi.org/10.1111.jfb.15017>



鰓葉中の仔魚



ゼニタナゴ



ゼニタナゴ 卵塊

春の水生植物園

かつての伊豆沼・内沼には多種多様な湿生植物が生育していましたが、開発や遷移の進行により数を減らしたものが少なくありません。当財団では、このような植物を水生植物園内に整備した湿地に移植し、増やしています。

いよいよ春本番を迎え、伊豆沼・内沼周辺では、湿性植物の開花が始まります。主なものとしては、4月中旬のサワオグルマ、ゴールデンウィーク頃は、カキツバタやニッコウキスゲの花が見ごろを迎えます。ぜひ一度ご来園頂き、伊豆沼・内沼の自然に親しんで頂ければ幸いです。



一迫小児童による植物園での植栽の様子



二華高生による植物園での植栽の様子



サワオグルマ



カキツバタ



ニッコウキスゲ

